市大再建派（民学同系）勝利する

阪大工で圧勝——各大学選挙から——

教養では圧勝

市大自治会

【市大支部発】第四回全学自治会中央執行委員選挙の結果、わが同盟をその中核とする再建派は主流派（社学同系）、全学連統一派（民青系）、革新グループ（平社同系）をおさえ、八名の当選者を出し勝利した。

全学区（定員十名）では、五名の立候補者は高位当選（一、二、四、五、七位）をかちとり、学部区（七学部、定員各学部一名）では、文、理工学部で圧勝、商学部ではじめて勝利した。経済学部で七票差で惜敗し、絶対多数を占めることは出来なかったが、主流派六名（全学区四名、経済家政学部区二名）、全学連統一派一名（全学区一名）、革新グループ一名（法学部区一名）無所属一名（医学部）で相対多数を確保し、今年度自治会治動の指導部隊として全学友の前に登場した。

今選挙にみられた特徴は全国学生戦線の情況、とりわけ関西におけるそれの反映が市大においても明確にみられたことである。即ち主流派の凋落、再建派の顕著な伸長、全学連統一派の一定の伸張がそれであり、市大学生運動の中核を成す教養において、とりわけ鋭い形であらわれた。

教養における全学区候補者の各派一人あたりの平均得票数は再建派五四〇、主流派二八〇、全学連統一派二六〇、革新G一六〇であり主流対反主流の比となれば昨年の四対六から一挙に二、二対七、八となっている。

主流派の利用主義的学生運動と街頭極左戦術、自治会民主主義の形骸下、市大学生運動の伝統の破壊により、政治的無関心層が増大する中で、再建派は「統一と民主主義の旗の下、市大自治会のルネッテンスを築こう」のスローガンを揚げ、学友に大胆に市大自治会の再建の必要性を提起し、五、二八にみられた主流派の無責任な行動提起＝自治会のひきまわしを撤底的に批判するだけでなく、再建のための次期中執の任務と、平和、教育、学生戦線統一等戦線別の一貫した政策でもって選挙に臨んだ。主流派系自治会において見られる無関心層の増大は統一派により反執行部の右翼的方向で組織されているが、市大における再建派の存在、具体的、科学的政策の提示、実行は無関心層の拡大を許さず、統一派の伸張を止め、学友の広範な支持を得た。政治的無関心層の増大を語るのみで、自らの指導を総括せず、政治闘争を放棄する一部にみられる誤りがここでも証明された。これが今選挙の示す意義と我々が教訓とする第一である。第一に、再建派の勝利が五、一五「日韓、ベトナム問題討論集会」（「民主主義の旗」二五号参照）にみられたようにクラスに根ずいた一貫した活動の継続の上にあることである。クラス討論の展開を、分裂活動としていた活動＝再建派の指導によるクラス討論の破壊を看過してきた革新Gの惨敗によってもこのことは証明されるであろう。第三に、平民「全学連」復帰のスローガンで臨んだ統一派の伸張が、彼等の関西における分裂活動を隠ぺいし、全学連のもつ、全国性、包括性、多面性でもって学友の支持を得たことを着過してはならないであろう再建派は彼等の分裂活動中止と府学連への結集をよびかけ、学友の支持を得たが、このことは、内外の緊迫に情勢の中で、「平和と民立主義、よりよき学園生活」を守り、拡大していくには緊急に学生運動の全国的統一が心要とされていることの反映を示しているであろう。

三年に亘る主流派に変り、ここに再建派が絶対的でないにしろ広範な学友の支持のもと登場した。（委員長、書記長、五名の担当責任者中四名が再建派）このことによって開かれる可能性は困難ではあれ極めて大きいものであろう。第一に、主流派によって破壊されてきた市大学生運動の再建と強化のための橋頭堡の確立である。第二に、民青系諸君のあくらつな分裂活動に対して、府学連の強化でなく、批難に専念してきた主流派にかわり、市大自治会が府学連の統一と強化のための強力な部隊として出現したことである。そして第三に、これらの上に立って、全国全自治会を包含する真に闘う全学連実現のための先進的翼として市大自治会が登場したことである。

主流派、統一派を市大学生運動から大衆的民主的に完全に放逐し新たなる学生運動の昂揚の中で、その中核存在として位置することを最大の課題として、一層の先進的、献身的活動を強化することが市大支部の任務であろう。

大学大で民青に勝つ

共青との統一選挙で

【大学大支部発】学大天王寺においては、自治委員選挙が終わり、平民系自治委員の進出を、六十三名中、十五名以下におさえ、共青との統一選挙体制の確立のもと圧倒的勝利をおさめた。

当初、平民系のかなりの予想されたが、前執行委員会の取ってきた正しい方針と全面的なクラス討論の開花の前に、彼らの分裂主義的方向が全学生に明確になり、彼らの大衆的な基盤のなさが再び証明された。

なお、執行委員は、自治会の中から選出されるため、最終的勝利は明白である。

学大池田においては、自治委員会カイメツ的情活を呈していたが、平和委員会が、前芝先生等を招「平和講座」を開き多数の学友の参加を勝ちとり、学友に正しい平和の要求と平和運動のあり方を示したため、全学友の中に層として平和の問題、民主主義の問題で行動する基盤と、それを基礎とした正常な自治会運営の可能性をうみ出した。

現在、民学同盟員と中心として自治会機能の回復と再建のために活動しており、その成果も選挙を通じて大きく勝ちとられるであろう。

阪大各学部で続々勝利

工学部学生大会成立

工学部第九回学生大会は、五月二十七日開かれ、圧倒的多数の学友の参加で成立し、全議題が信認承認された。

当日、三百名近くの学生が学生大会に出席し（成立数二百六十二名）総括、任務、執行委員、諸議決等が活発に討論され、任務方針二百十三対一八、執行委員（民学同系）二百七対二十二等で承認、信任された。

学生大会の成立は、昨年の春、第七回大会に続き三度目で、各クラスの代議員を先頭としてのクラス討論と、現在の内外のきびしい情勢を反映したものであろう。

とくに移転と工学教育の問題では、民青系が何ら対応できないため方針すら出しえず、全学連問題でも、具体的に彼らが行動の統一を拒否している事実の前に、圧倒的多数で、新執行委員（民学同系）が信任された。

教養部

自治委員会において、総括、方針案が決定され、執行委員も十名中民学同系が九名選出（一名は無党派）された。

しかし六月三日に開かれた学生大会が不成立のため、二十日現在全学投票中である。多数で信任される模様である

他の各学部

法学部、文学部は民学同系執行委員が圧倒的多数で信任された。

医学部も、インター斗争の方針の正しさにより、民青系が学友から孤立し、民学同系執行委員が圧倒的多数で学友の支持を得た。

理学部、薬学部、経済学部も選挙進行中であるが、いずれも民学同系が圧倒的勝利を納める模様。

（阪大支部発）

六月十九日、編集局宛、中央大学より民主主義学生同盟結成に際しての決意を印した便りをよせられてきた。

なかった故にその上昇的契機を確実にうちかためていく任務は生やさしくない。しかし、それだけに運動の内在的志向は新しい